

雪中の雑詩

市河寛齋

破窓寒は徹す五更の風

八尺の身材曲そ弓に似たり

氷柱幾条垂れて地に到り

水晶簾外月玲瓏

【作者】市河寛齋(一七四九〜一八二〇年)(寛延二年〜文政三年)名を世寧と言ひ、上野の人。初め徂徠の門人大内熊耳に従つて古文辞を学び、次

いで関松窓から朱子学を学び、更に井上蘭台の門人高橋九峯に就いて折衷学を学ぶ。その後林鳳潭の門人となり昌平齋の員長となるが、鳳潭没後は職を辞し、詩社の江湖詩社を設立する。その後富山藩の儒臣となり、致仕後は長崎に遊ぶ。その書に、『日本詩紀』五十卷・『全唐詩逸』三卷・『寛齋遺稿』五卷・『寛齋百絶』一卷・『寛齋余稿』八卷・『陸詩意註』七卷・『宋百家詩』七卷等が有り。

【語釈】*破窓…破れた窓。 *五更…午前三時頃から五時頃まで。 *八尺…ここでは「長身」の意。 *氷柱…つらら。

水晶簾…水晶で作つたすだれ。ここではつららが垂れ下がっているのをいう。 *玲瓏…玉のような透明な美しさの形容。

【通釈】敗れた窓からは、夜明け前の身を刺すような寒さの風が入ってきて、ひとしお骨身にしみ渡る。だから大きな体を弓のように曲げて、縮まって寝ているのである。外を見れば、軒からは何本ものつららが垂れ下がって、地にとどくほどであり、まるで水晶のすだれをかけたようである。そのむこうに透き通るような月の光が照り輝いている。